

馬場孤蝶

変り行く東京語





# 変り行く東京語



## 一

出版物の多くなつて来たことと、それ等の出版物が大抵皆言文一致——即ち大体東京語で書かれていることとが、東京語をば地方の僻陬へきすうまで弘布ぐふすることになりつつあるには相違なからうが、口語の上では、東京語と地方語との差違はまだなかなか甚だしいように見受けられる。そういう点では関東語と関西語だけの差違にしても

随分甚だしいものがあると思う。

けれども、昔——徳川時代——は、少くとも江戸の上流——即ち士分の言葉は、もともと大体京都の上流語に標準を取ったものであったのであろうから、地方の藩庁の公式の言葉とは余程共通なるところがあり、少くとも名詞、動詞などで、公用語以外にも、同一なものを用いていたことが少くなかったように考えられる。

僕の生国は土佐であるが、麻裏草履あさうらぞうりのことを藤ふじくらと  
いっているのを、少年の時分聞いたことがある。東京ではその時分——明治十一二年頃——でも、もう藤くらと

いう語はなくなっていたのだが、明治二十年頃東京生れの或る老人と話しているうちに、その老人などは藤くらという語を昔は使っていたことが分った。

土佐では、嘲弄的に意地悪く人に言いかけるのを、きよくるといふ。僕の父母などがその言葉を用いるのを聞いて、僕は地方語だと思っていた。所が、『柳樽』を見ると、「ぶ立腹など、い内儀をきよくるなり」というような句のあるのを以て見れば、きよくるが地方語でないことは明かである。

義太夫の『泉三郎館』の五斗の生酔なまえいの唄の中の「け

なりかろ」が僕には解らなかつたが、紀州生れの中村啓次郎君が、それは紀州あたりでは今日も用いる語で、羨ましかろうの意味なんだと説明してくれた。ところが熊谷辺から、茨城の利根川沿いの地方へかけてのあたりでは、今日でも羨ましいというところをけなりいと云うのだということ、近頃になつて聞いた。

引窓のことを大阪あたりでは天窓というのだと聞くのだが、濡髪ぬかみの長五郎の義太夫は『引窓の段』であつて、天窓の段とは云わない。昔は引窓が東西の共通語であつたものと見て宜しかろうと思う。



本を押入れから出して実例を挙げるのは億劫おつくうだが、口語に近いものと見てよかろうと思う。小唄などに拠る時は、東西の言葉——少くとも双方の都会での言葉——が可なり共通の分子を持って居ったことは窺い得られるであらう。

京都の言葉では——殊に大阪の言葉などは——今日までには、在方ざいかたの言葉が入って、余程乱されたのであらうと思われる。東京の言葉も勿論そうである。殊に明治になつては、東京在来の上流社会は全滅してしまつたと云つていい位であるのだから、それ等の社会の伝統ある言

葉は消滅し去って、今日の東京語は主に商人、職人の言葉のみが残った訳であり、それへ持って来て、次第に、地方語からの侵略が加わって行くという現状である。

今日の東京の所謂身分のいい人々というのは、大抵地方の身分の余りよくなかった人々の末であるのだから、その言葉の如きも、従来の標準語の規模から云えば決していいものとは云えないであろう。それ等の人々の子弟で今日物を書く人々の言葉の、従来の日本語にっぽんごの格から云えば、甚だ拙いものであるのは、その父兄たちに言葉の訓練が欠けていた為であろうと思う。

## 二

然し、言葉は死物であつてはならず、必要な変更は進歩の根抵になる訳であるのだから、変遷そのものを拒斥きよせきすべきでないことは勿論である。唯吾々の注意すべきことは、吾々物書くともがらが、言葉に不必要な変更を加えて、意義なく従来 of 言葉を乱すようなことをせぬように心することである。

従つて、言葉の誤用などは十分に注意して避けなければ

ばならんと思う。

小児の戯れにいいたちこつことというのがあつた。これを相報あいむくいるの意味で、大人の用語にすることは、誰も知つているところであるが、此の語の末すえのこつこは総べて澄んで発音すべきであつて、決してごつことというが如く濁つて発音すべきではないのだ。ところが、近頃の印刷物には、此の語が屢々いたちごつこと印刷されて居おるのを見かける。甚だしきに至つては、鼪たじごつこと書かれて居るのさえ見かける。

僕等はあのいいたちこつことという発音のうちに、あの

手を順じゆんじゆん々に互に抓つねりあう動作がいかにもあざやかに表  
 現されているように思うのだから、語源は鼬いたちの動作か  
 ら起つたものにしたところで、これを鼬ごつごつこと訂正し  
 たくない。此の語を用いる位ならば、矢張り小児こどもの言葉  
 どおり、いいたちこつこをそのまま用いるのがいいと思  
 うのだ。

言語の知識が貧弱なので、確なことは云い得ないが、  
 いいたちこつこには鼬ごつごつこ即ち鼬の真似をして遊ぶと  
 か、鼬のようなことをしあうとかいうような意味はない  
 ように思われる。あの語は、小児が手をつねり合う調子

をば音を以て表あらわしたただけのもので、語自身には何の意味もないものであるように思う。

ある行為をさんざんするという意味で、たらだらという語を用いる。即ち、お世辞たらたらとか、愚痴たらたらとかいふのである。此の語は勿論たらと上を澄んで発音し、下しもをだらと濁って発音するのだ。ところが此の頃の印刷物には上のたらをだらと印刷してあるのを度々見受ける。尤もこの方は誤植の場合もあるうかとは思ふものの、同じ新聞などで、何時もたらだらがたらだらになっているのを見ると全く誤植とも断じ兼ねる。そういうの

などは、地方の印刷物などでは、必ず誤植通り印刷するであろうと思う。従って、地方で物書く人々は愚痴だらだらという語があることと思つて、平気でそれを用いることになるおそれ虞は十分あるうかと思う。

今日では語源はとにかく、このたらだらという語の音おんそのものに、くどく繰返すといったような意味が表わされていくように、吾々の耳には聞き取れるのであるから、これをたらだらと変えてしまつては、音から来る感じはまるで違ふであろう。

なんぼ地方の人でも今日では言葉の知識は可なり広く

なっているであろうから、まさかにたらだらをたらだらと間違えるようなことはないであろうと、思う人は多かろうけれども、実際はなかなかそう楽観を容ゆるさない。随分な間違いがそのまま伝わるおそれ虞おそれが十分あるものと見るのが宜しいと思う。

これは、それとは事かわっているが、ある地方新聞に源太郎馬車という言葉があつた。どうも円太郎馬車の覚え違いらしいのだ。







日本文学電子図書館

---

変り行く東京語

著 者：馬場孤蝶

制作者：宮澤一郎

底 本：「明治の東京」

中央公論社

昭和17年5月15日 印刷

昭和17年5月20日 発行



日本文学電子図書館